■生後三年間の教育

生後の三年間の子育ての中で、最も大事な事は「幼児への豊富な語りかけ」だと思ふ。『聖書』によれば「言葉は神なりき」である。だから、言葉によって作られる心の働きを“精神”と言ふのである。人間が人間であるのはその“精神”のためであって、その肉体にないことは、狼に育てられた少女カマラの例でよく解ると思ふ。

カール・ヴィッテは牧師であったから、言葉の教育の重変性を特によく知ってゐたのであらう。生れた翌日から、息子のカールに言葉の教育を始めたのである。それで、普通の子供の十倍もの言葉を覚え、これを使ふことによってあの偉大な人生を開拓して行くことが出来たのである。

幼児期の幼児は、周囲に在るものが良いものであらうと悪いものであらうと、おかまひなくすべて吸収して、それで自己を形成して行くのであるから、この時期には、頻繁な言葉の語りかけが必要だと言っても、その言葉を選択することが極めて大切である。

言葉は、人間の心を形成し、かつ、これを養ひ育てるものであるから、出来る限り、優しく美しい言葉や、正しく力強い言葉を選んで使ふことに努め、醜悪な言葉や下品な言葉は幼児の耳に入れないやうに、極力注意する必要があると思ふ。

これは、少なくとも幼児期の三年間、その努力を継続すべきであって、さも無ければ効果は薄いであらう。その代り、三年間継続して実践できたら、あとは仮に放って置いたとしても、本人の精神がもう立派に出来上ってゐるのであるから大丈夫である。俗に言はれてゐるやうに、「三つ子の魂、百までも」だからである。

日本人は「熱し易く、冷め易い」と、よく言はれるけれども、子供の教育はこれであってはならない。教育は“継続”して実践することが何よりも大切である。その事を可能にするものは、唯々わが子に対する強い愛情と、それによって支へられろ忍耐力とである。教育には知識やテクニックなど二の次である。「石の上にも三年」と言はれる。わが子のため、三年間だけは是非とも辛抱して実践してほしいと思ふ。